

沖縄八重山文化研究会会報

第 21 1 号

発行 沖縄・八重山文化研究会
事務局 沖縄県立芸術大学付属
研究所 波照間永吉研究室
那覇市首里金城町三六
〇九八八八二一五〇四三



第二一二回沖縄・八重山文化研究会（会長三木健）は、二〇一〇年五月十六日、県立芸大付属研究所内で開かれ、山本正昭氏（沖縄県立埋蔵文化財センター）が「琉球列島の集落遺跡から見た近世の成立」と題して発表した。

琉球列島の集落遺跡から見た近世の成立

山本 正昭

はじめに

薩摩侵攻から四〇〇年を過ぎて、近世という時代がどのような形で幕を開けたのか、そしてグスク時代、古琉球時代がどのように終焉したのか、未だ検証されていない部分が多く見られる。近い将来において整理していくべき問題は山積していることは言うまでもないが、今回の報告はその問題解決の足掛かりとして考古学から見えてきたグスク時代、古琉球時代（以下、中世相当期）と近世の始まりについて集落遺跡の変遷から読み解いていくことを目的に論

じていく。

1. 各時期における集落遺跡の様相

沖縄本島では近年、中世相当期から近世における集落遺跡の発掘調査事例が増加しており、集落の変化について新たに考察の枠組みを用いて読み込んでいくことのできる段階に來ていると言える。しかし、事例は増加しているものの集落遺跡の全面発掘調査事例は僅少で、その全容を通しての検証は残念ながらまだ先の話であると言える。それらの史料的制約を前提にしつつ、部分発掘で得られた成果の組み合わせであるものの、これまでに蓄積された遺跡情報から見えてきたものに焦点を当てて、考察していききたい。

沖縄県内における十五〜十八世紀までに存続した集落遺跡を概観する限りでは、中世相当期から近世にかけて大きな変化をもたらす要素となってくるのはやはり区画施設であると言える。十四世紀後半から十六世紀まで続く集落遺跡では那覇市首里の天界寺跡集落、南風原町津嘉山の津嘉山古島

| | |
|---|---|
| <p>遺跡、今帰仁ムラ跡が見られるが、遺構を区画する施設についてはとくに確認することはできない。また何度も建て替えが行われたのか、かなりの密度で柱穴が分布している状況が見られ、明確な建物プランを見出すことは困難である。他方で竹富町竹富の花城村跡では区画機能を有した石積み囲い遺構が見られる点で沖縄本島地域の状況と異にしているのが窺われる。ただこの石積み囲い遺構は整然と配置されるといった状況ではなく、石積み囲い相互が直接、連結しており、かなり不規則な平面プランを有している。このように十四世紀後半から十六世紀までの集落遺跡は全体的な斉一性が見はかられていないというのが特徴として掲げることができる。</p> | <p>次に主に十五世紀～十八世紀に成立した集落遺跡を概観していくと、浦添市当山の当山東原遺跡ではグスク時代の遺構群に隣接して十七世紀から成立してくる遺構群が確認されている。グスク時代の遺構群とは異なり、建物プランが明確であり、また建物の方向軸も一定の方向に合わせてくる状況が見られる。八重山地域においては斉一性が見られない石積み囲いの中で通路を有する石積み囲いの一群を窺うことができ。当該遺跡の南に位置する慶来慶田城遺跡では通路を有する石積み囲いの一群と屈曲する通路で構成された、不完全な碁盤目</p> |
| <p>2. 集落遺跡の分類と変遷 十四世紀後半から十六世紀まで続く集落遺跡には街路空間が見られないことから街路未配備タイプ、十五世紀～十八世紀に成立した集落遺跡は街路が見られるものの屈曲が著しいため街路不井然タイプ、十七世紀以降に成立した集落遺跡を街路井然タイプとそれぞれ仮称する。これらが変遷していく方向性としては、集落の区画構造において斉一性が強くなっていく状況が看取される。まずは街路未配備タイプから街路不井然タイプへ変化していく要因であるが首里王府による最小生産単位の明確化を推し</p> | <p>状のプランを有する石積み囲いの一群が隣接している。このように建物ないし通路において同方向軸を意識している状況をこの時期の集落遺跡において読み取ることができる。 最後に十七世紀以降に成立した集落遺跡を概観していくと、宜野湾市新城の新城古集落遺跡では整然とした碁盤目状の区画と想定される溝遺構が検出されており、竹富町西表の網取遺跡では短冊形の区画が現在も地表面から確認することができる。これらの二遺跡はかなり斉一性を有した井然の街路区画を有しているのが特徴で、その成立時期については網取遺跡の出土遺物から十七世紀にその萌芽を見ることができ。</p> |
| <p>以上のように集落の区画構造において斉一性が強化されてくる背景として、首里王府による地方統治システムの確立と関連づけることができる。このことは首里王府が</p> | <p>進めたことの現れであると考えられる。十六世紀において首里王府による主要な街道が敷設、整備されていく中で地方における統治システムの構築も並行して行われていたものと考えられる。その大きな問題として各地域における生産量の把握があり、そのために集落内に道路網を敷設することで各世帯の把握、すなわち最小生産単位を把握が成されていったものと想定される。 そして街路不井然タイプから街路井然タイプへの変化は仲松弥秀が既に述べているように一七三七年の地割制実施に見られる首里王府主導による土地利用規制が主要因であると考えられる。但し、網取遺跡では十七世紀にその萌芽が見られるため、一七三七年以前において区画の方向軸となる施設が既に存在していたと考えることができる。街路井然タイプは各区画の均質化がはかられ、それは同時に集落成員が等しい居住地に割り当てることによって体现される並列化が推し進められていったと見ることができ。このことによつて身分の固定化を促し、首里王府による地方統治システムが表面上において末端まで貫徹していったことを意味している。</p> |

集落へ規制をかけていったことを意味しているのと同時に、首里王府による中央集権化が最終的に街路井然タイプとして集落形態に現れたものとして捉えることができる。

3. まとめ

本報告においては八重山地域の事例を多く紹介してきたが、これは琉球列島地域の集落遺跡を画的に捉え、八重山地域の地域の特徴を評価しないというものではなく、現状において近世の琉球に見られる集落変化を読み解く上では発掘調査事例が多い八重山地域の成果は無視できないと言える。ここでは、あくまで集落の時間的変遷を説明することを主目的に据えており、中世相当期から近世にかけての変化をモノから捉えなおすことを検証の出発点として位置づけた。よって沖縄本島地域と八重山地域との地域的相違については示し得ることはできなかった。当然ながら沖縄本島地域と八重山地域における中世相当期から近世への変化についてはそれぞれの地域で特徴が見られるものと考えている。ただし、これを解決するには未だ資料不足の感があり、限界性が看取されたため踏み込んで検証することができなかった。この点に関しては次の問題設定として捉え、本報告を締めたい。

文化短信

骨講座がスタート

新石垣空港建設現場で発見された二万年前の人骨に関心が高まっていることを受け石垣市教育委員会と日本人類学会は「骨講座」骨が語る人類のすがた」と題する人類学講座を開始した。市立図書館視聴覚室で計五回の講座を開く。

六月六日の初回は「骨のおもしろさを学んでください！」として土肥直美氏が「人骨からどんなことがわかるのか?」（琉球大学）、菅原広史氏が「動物の骨も面白い!」（浦添市教育委員会）。会場は中学生からお年寄りまで一〇〇名を越す大盛況。人骨からどのようなことが分かるのか、専門家のわかりやすい講義に聞き入った。第二回は六月十三日に「旧石器時代について学びましょう!」と題して行われた。

今後の開催予定は以下。受講無料。
・第三回 六月二十七日「骨の科学分析について学びましょう!」
・第四回 七月四日「沖縄から外に目を向けてみましょう!」
・第五回 七月十一日「沖縄の人骨について学びましょう!」

八重婦連が五二年の歴史に幕

八重山地区婦人会連合会はこのほど二〇一〇年度定期総会を開き、八重婦連を発展的に解消し、石垣市婦人連合会会長に地区長兼任を依頼することを全会一致で決定、一九五七年の発足以来、五二年におよぶ歴史に幕を閉じた。八重婦連は、五七年六月に発足。これまで八重山の三市町の婦連のまとめ役、沖縄連とのパイプ役として、女性の地位向上や青少年の健全育成、平和問題などに取り組んできた。だが活動拠点や活動資金の減少などの課題に直面し、今回の発展解消となった。

与那国町町史「民俗編」を発行

与那国町が町史第二巻「民俗編」をこのほど発行した。平成十五年に企画して以来六年に及ぶ編纂作業に携わった米城恵氏が完成した図書を紹介した。A4判、六八三ページに及ぶ「民俗編」は、与那国島の神と人、自然とのかかわりを通じ、人間の一生をテーマに島で展開される民俗そのものを浮き彫りにしている。聖地と祭祀、「まち（祭り）」の諸相、死者儀礼の位相を明らかにした。神歌が聞こえてきそうな風俗写真も圧巻である。

新刊紹介

八重山の移民の歴史をひもとく好著
三木健著『八重山合衆国』の系譜

南山舎の「やいま文庫シリーズ」として刊行された本書は、近代八重山の移民の歴史を検証した一冊である。

著者は長年「琉球新報」の記者として活躍。その後は本会会長はじめ、ニュー・カレドニア友好協会会長など市民レベルの文化活動、さらに石垣市史編集委員、竹富町史編集委員なども務める。著作も多く、特に西表炭坑に関しては、二〇年以上に及ぶ調査により、沖縄近代史の流れの中に位置づけた功績は大きい。

本書は大きく二部にわかれ、第一部は今回新たに書き下ろしたもの。『八重山合衆国』形成史」として、近代の大和寄留民・台湾からの移民、さらには沖縄本島からの開拓移民など、「公的な」八重山の移民の歴史をひもとく。後半の第二部は以前に書いたものを加除訂正したもの。『八重山合衆国』を生きた」として、著者の祖父で大和寄留民の代表的存在でもある三木専太郎の軌跡を描いた「私的な」記録であるが、著者の客観的な記述は、単に個人史にとど

まらず、近代の八重山社会の一端を見事に描いている。

とここで標題であるが、八重山は歴史的に各地からの移住者を受け入れ、彼らと調和するなかで八重山社会を作りあげてきた。それをさして「八重山合衆国」と称するのだが、著者は八重山の近代史を織物に例えて、「伝統的な社会としてのタテ糸に対し、外からのインパクトとしてのヨコ糸が組み合わされて、一つの模様が出来上がっている、と思うのである。基調としてのタテ糸が、巧みにヨコ糸を取り入れて、調和のとれた布を織り上げてきた、...それが私という『八重山合衆国』である」とする。

では、「外からのインパクト」である「移民」は八重山の近代史のなかでどのように位置づけられるのか。第一部は、明治期の大和寄留民、たとえば製糖にかけた中川虎之助の名蔵開墾、糸満漁民の進出、寄留商人が石垣の商店街を形成していく過程、大正期のカツオ漁業や西表炭坑、昭和戦前期のバイン産業と水牛を導入した台湾人移民について、さらに戦後の開拓移民などについて、資料に基づき検証していく。とはいえ、そこには統計数字には還元されない人の顔や営みが明快に綴られており、読み物としても楽しめる内容になっている。第一部と密接にからみあいながら記される第二部は、著者の祖父を中心としたこと

もあって私的なエピソードも交えられ、ときどき幼い著者が顔を出す。三木専太郎は明治十四年に香川県で生まれ、日露戦争に従軍したあと、大正時代に農業移民として台湾の花蓮に移住。やがて基隆で山菱商会を設立、材木を扱うようになり、石垣島に出張所を開設、昭和六年には製材所をつくり、さらに三勇商会を設立して台湾との貿易を行うなど、八重山の経済人として定着していく。著者は専太郎の生涯をたどりながら、彼と関わる形での寄留商人の群像を描き、石垣の商店街の発展をなぞっていく。現在の石垣の街を知る者が読めば、郷愁とともに発展の基礎を築いた人々の歴史に感慨を覚えるだろう。

移民県と言われる沖縄、その中でも地理的に台湾に近いところから、八重山は台湾に多くの移民を送り出し、あるいは台湾から移民を受け入れてきた。従来の移民史研究は移民先の調査に重点が置かれ、八重山に言及することはあまりなかったが、最近の市町村史の移民編では八重山への開拓移民の調査などが収録されることも多く、移民史研究は新たな地平を迎えつつあるといえる。本書はそうした中であって、地元八重山の移民史研究、そして寄留商人研究としても、一読の価値のある書である。

(南山舎、B6版、三二二頁、二〇九〇円)

(漢那敬子)